

笑いについて —ベルクソンとスペンサー—

北 夏子

はじめに

笑いについて、アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859–1941) はその『笑い』² (*Le rire*, 1900) で次のように述べている。

この種のおかしみがいかに強く、また頻繁に出てくるかを考えてみると、それが若干の哲学者たちの想像力をなぜ動かしたかのわけがわかる。気がつかずして振出しに戻ってくるために、散々な道のりを歩くということは、とりも直さず大骨折り損のくたびれ儲けというやつだ。人がこんな風に滑稽を定義したくなったのも、無理はない。ハーバート・スペンサーの考えはこんなだったように思われる。笑いは努力が突然空に逢着した徴候であろう、と³。カントは既に言っている、《笑いとは期待が俄かに無に解消することから生ずる》と。我々もこれらの定義がすぐ前に述べた例に適用されることは認める。でも、その定式には二、三の制限を加えなければならぬだろう。笑いを催させない徒労の努力もまた多いからである。だが、もし我々のすぐ前の例が小さな結果に到達する大きな原因というものを提示したとするならば、我々はそのまた前のところで、それとは逆な仕方、小さな原因から出てくる大きな結果とでも定義しなければならなかった別の例をも引用しておいた。実のところ、この第二の定義の方が第一の定義よりもずっと値打ちがあるといったものでもなかろう。原因と結果との間の不均衡 (disproportion) は、それがどちらの方向に現われたとしても、笑いの直接の源泉ではない。我々はこの不均衡が或る場合にあらわしうる或る物、つまり言うなら、原因と結果との系列の背後にこの不均衡が我々に透かして見せている特殊の機械的仕組みを笑うのである。(下線強調引用者、R. 65/83) ⁴

ここには、下線を引き強調した箇所にもある通り、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820–1903) の考察に対するベルクソンの見解が含まれている。このベルクソ

ンの見解に対して、林達夫は「スペンサー理論（*Essays: Scientific, Political and Speculative*, II, 452ff. Appleton, 1892）は、こんな簡単な要約に収まるものでなく、フロイトが『機智論』で高く評価して彼の先駆者の一人と見做すことになる、別な創見も含んでいる」と林訳『笑い』の訳注で指摘する⁵。林が「スペンサー理論」と呼ぶこの理論は、“The physiology of laughter”のことである⁶。本稿は、この指摘を参照しスペンサーの“The physiology of laughter”（本稿では、「笑いの生理学」と訳す）における考察と、スペンサーの笑いについての考えを明らかにし、ベルクソンが上記のように要約した理由を明らかにすることを目的とする。本稿は次の手順で進めることにする。まず、スペンサーの「笑いの生理学」について、その内容を整理し、ベルクソンが要約した箇所を示す。次に、ベルクソンの『笑い』を要約した上で、ベルクソンのスペンサー批判がもつ役割を示す。

1. ハーバート・スペンサーの「笑いの生理学」

スペンサーは1860年3月に*Macmillan's Magazine*に発表した論文、「笑いの生理学」を「何故、子どもが大人の帽子をかぶると私たちは微笑むのか？」という問いから始める⁷。この問いに対する「笑いは不一致（incongruity）の知覚から生じる」⁸というよくある答えに触れつつ、その回答に対する二次的な問い、「このような奇妙な身体的活動を伴う不一致の感覚はどのように生じるのか」⁹という問いが生じることにについても触れる。考察の過程で、笑いは私たちが他人の屈辱を見る際に生じる喜びに基づくという意見が扱われるが¹⁰、この意見は奇妙な運動の説明にはなっていない、と指摘される¹¹。運動についての説明が笑いの現象の説明には不可欠と考えていると思われるスペンサーの笑いを巡る問いは次のようなものになる。「大喜びしたり、観念の予想外のコントラストに感銘を受けると、なぜ、顔の特定の筋肉と胸と腹部の特定の筋肉が収縮（contraction）するのか？」¹²。この問いから、笑いという現象に感情や感銘といった精神的活動と、顔面や胸部や腹部の筋肉収縮といった身体的活動の両者が係ると考えられており、連続して生起しているように見えるその二種の活動がどのような関係を結ぶか生理学的に考察し、明らかにしたいという考えを見て取ることができる。

1-1. スペンサーによる笑いについての考察の前提

スペンサーは、反射運動、心臓の鼓動などの感覚を伴わない不随意運動、昆虫など

に見られる自動的な運動に言及し、神経と筋肉の関係について考察し始める¹³。神経の興奮と筋肉運動の関係については、神経の興奮が筋肉運動を生じさせる傾向がある、と言われる¹⁴。事例を用いて、「情動と感覚は身体運動を生じさせる傾向がある」ことが示される¹⁵。神経の興奮が筋肉に伝わるのと同じように、内臓へも伝わると考えられている¹⁶。心臓や血管の収縮がそれを示していると見なされている¹⁷。神経の興奮は、神経系の他の部分へも伝達されると言及される¹⁸。意識の継起性はこれに関係している、とされる¹⁹。感覚が観念と感情を興奮させ、それが連続する、とされる²⁰。つまり、神経中枢が緊張を帯びた際に自身を放出する三つの経路（channel）がある、とされる²¹。1) 他の神経中枢、2) 運動神経、3) 内臓の神経²²。1) により、他の感情と観念が引き起こされることがあり、2) により、筋肉の収縮が引き起こされることがあり、3) により、内臓への刺激が引き起こされることがある、とされる²³。これらは神経-力（nerve-force）がとるルートである、とも言われる²⁴。この経路に放出は多様な比率でなされる、と言われる²⁵。放出先が複数ある場合は、一つの経路の閉鎖は、他への多量の放出となり、二つの経路の閉鎖は、他の一つの経路への多量の放出となり、一つの経路への多量の放出は、他への少量の放出となる、とされる²⁶。深い悲しみが静かな悲しみであるといった日常的な経験がこれを例証する、とされる²⁷。つまり、2) への放出が抑圧されると1) への放出が増大するということである。また、激しい怒りのもとでは私たちは速足で歩くことで慰めを得る、といった経験もこれを例証する、とされる²⁸。つまり、2) への放出の増大によって1) への放出が抑えられる。反対に1) の増大によって2) が抑えられることもある、とされる²⁹。神経の興奮は、それ自身何らかの仕方で消費されなければならない、と考えられている³⁰。スペンサーの思索の前提になっているのは、「神経」「興奮」「収縮」「緊張」という諸々の概念の「量」的關係である。そこに生じている「力」（「神経-力」）は、発生したからには消費されるはずの量と考えられている³¹。この前提で、スペンサーは笑いという現象を生理学的に考察していく。

1-2. スペンサーの「笑い」について

1-1 で示した事柄を前提にして、スペンサーは、笑いを筋肉の興奮（excitement）の一つの形態であって、身体的活動における感情のはけ口を示していると考えられていることを示す³²。笑いをつくる筋肉の活動は、それ自身目的を持っていない、とされる³³。笑いは筋肉の収縮運動である、とされる³⁴。この収縮運動は何を目的にするわ

けでもないエネルギーの放出の結果生じている運動である、とされる³⁵。発話器官、更には、呼吸に関する筋肉に、感情による活動は現われやすい、とされる³⁶。スペンサーによれば、笑いがどの身体の部分で生じるか特定することは意味を持つ。笑いが、発話器官である口が位置する顔の筋肉や首、そして呼吸器官に近い上半身の筋肉に生じる現象であるのは、そこが最も感情が現われやすい器官でありそれを形づくる筋肉であるからである。神経-力の発散は、この筋肉を通して為される。習慣的に感情を表現している筋肉に、感情のはけ口としての運動である笑いの運動も生じてしまうのだと考えられていると思われる。この考察は、笑いが特定の身体の部分に生じる理由についての考察である。この笑いの身体的現象が位置する部分の理由に基づいて、スペンサーは論文の初めに述べた不一致を知覚することで生じる笑いを続けて考察する。

劇中の場面が不意に邪魔された際に生じているような、不一致の知覚に続く笑いは、行き着くはずの道筋が閉じられたために放出できなかったエネルギーが笑いという筋肉運動によって解放されたものである、と言われる³⁷。スペンサーによれば、状況に制限されて行き場を失った感情は、習慣的に感情を表現している筋肉の運動によって解放されるのであり、それが突発的な笑いになると考えられている。要するに、笑いの現象が生じるのは、私たちの身体的構造および習慣によるのである。また、「笑いとは本来、意識が不意に大きな（great）事柄から小さな（small）事柄に移された場合にのみ生じる——私たちが下降性不一致（*descending incongruity*）と呼べるような事柄がある場合にのみ生じる」とされる³⁸。このスペンサーの考察によると、笑いはある量的過剰の流出を意味していると考えられる。

スペンサーの考えによれば、彼自身の問いに対しては、次のように答えることになるだろう。不一致な知覚は、意識されないうちに知覚対象が大から小に遷移されることにより生じる。その知覚により突発的に特定の筋肉の収縮が生じるのは、私たちの感情表出における習慣による。

1-3. ベルクソンが用いたと思われる箇所とその考察

ベルクソンは、「ハーバート・スペンサーの考えはこんなだったように思われる。笑いは努力が突然空に逢着した徴候であろう、と」（R. 65/83）と述べていることは先に見た通りである。ベルクソンのこの言及は、上で整理したスペンサーの笑いについての理論のどの部分を批判したものであると考えられるだろうか。「スペンサーの考え

はこんなだったように思われる」という一文からも、ここにスペンサーの文章の正確な引用がなされているわけではないであろうと推測することができる。「努力」が「突然」、「空に逢着する」という言葉の組み合わせにより、本稿では、スペンサーが劇場で生じる意外な事態に対する突発的な笑いについて考察する次の箇所が念頭に置かれていると考える。

しかし、今、この大量の神経エネルギーは、生まれかけていた新しい思考と情動を同程度の量産み出してそれ自身を消費することを許されず、その流れを突然せき止められる³⁹⁴⁰。

そして、このエネルギーは運動神経から筋肉に達し笑いになると言われる⁴¹。つまり、スペンサーが述べているのは、突然その流れをせき止められたエネルギー（あるいは力）は、笑いを形づくる別の筋肉運動によって発散されるということである。しかも、スペンサーが述べているエネルギーとは、笑う者自身の身体におけるエネルギーであり力である。このエネルギーないし力が突然行くはずのルートを遮断されることによって突発的な筋肉運動が生じるとされていると考えられる。

スペンサーとは違って、ベルクソンの書き方は、私たちが笑う対象の状況説明になっているとも受け取ることが出来る。対象の努力が突然無駄になる状況を見て私たちは笑うのだと。ただ、スペンサーの理論でも状況に応じた身体現象が記述されていたのであり、どこにエネルギーないし力を見て取るのかの違いはあるとしても、何がそのエネルギーないし力を発生させているのかについては、一致しているようには思われる。それというのは即ち対象でありここではストーリーと出来事である。笑う対象の状況説明になっているとしたら、ベルクソンは私たちに笑いを引き起こす対象にスペンサーの理論を適用していると言える。

スペンサーの理論を検討した後の私たちは、ベルクソンが、

原因と結果との間の不均衡は、それがどちらの方向に現われたとしても、笑いの直接の源泉ではない。(R. 65/83)

と述べている箇所が、スペンサー批判になっている可能性に気づく。というのも、スペンサーの、下降性不一致についての考察を想起させるからである。スペンサーは「原

因」および「結果」とは述べていないが、不意に大から小へと意識の移行が行なわれる場合に笑いは生じると述べていた。つまり時間的変遷を伴うある不均衡な状態間の推移がある場合に、笑いが生じると考えていたと見做すことができる。そしてこの批判によってこそ、ベルクソンはスペンサーを自分とは異なるものとして批判することが可能になっているように思われる。ベルクソンと異なりスペンサーは笑いを引き起こす対象と笑う者自身の生理的現象を区別し、その生理的側面のみ考察を加えている。これに対して、ベルクソンは、次節で整理するように、私たちが笑う対象についての考察を展開していく。

2. アンリ・ベルクソンの『笑い』⁴²

本節では、本稿の冒頭で引用した文章が含まれるベルクソンの『笑い』の全体像を示し、「笑い」がどのように考察されているかについて示すことにする。そして、最後にベルクソンによるスペンサー批判がもつ役割について考察する。

2-1. ベルクソンの『笑い』の要約

『笑い』は三つの章からなる。第一章では、人間的 (*humain*) であることが滑稽さ (*comique*) を誘うこと (R. 2/13)、笑いに伴う無感動 (*insensibilité*) について (R. 3/14)、その集団性 (R. 6/17) について、また知性的注意が用いられる点 (R. 6/17) について述べられる。放心 (*distraktion*) (R. 9/20-21)、不恰好であること (*difformité*) (R. 18/30)、流動性の中のこわばった (*raidi*) ものや固定した (*figé*) ものが私たちには滑稽に感じられると言われる (R. 18/30)。因果関係がはっきりしている再構成可能な放心 (R. 9-10/21) についての考察が、自動現象 (*automatisme*) についての考察 (R. 19/32) につながり、私たちの関心を引く歪み (*contorsion*) (R. 21/33) について、更には、歪みとして現れる身体運動がそれに似てくるといわれる機械 (*mécanique*) について (R. 23/35)、私たちにそれとして現れてくる自動機械 (*automatisme*) (R. 24/38) について言及される。「生けるものの上に張付けられた機械的なもの」(R. 29/42) を私たちは笑うのだが、ところで、私たちは社会を生きているもの (*un être vivant*) と捉えている (R. 34/48)。とすれば、そこで機械的に反復されているように見える儀式的な側面 (*le côté cérémonieux*) を滑稽に感じて不自然ではないのである (R. 34/49)。精神と対立させて肉体が、内容と対立させて形式が、そして形式と規則が職業と結び付けられ、それらによって喚起される滑稽もあるとされる (R. 40-42/54-57)。これらの議論により、

生命に貼り付けられた機械的なものというイメージは、流動的社会とそこにある固定的職業というイメージと結びつき考察されていく。「芸術の下位に技巧というものがある。我々が今や分け入ろうとするのは、自然と芸術との中間たるその技巧の地帯である」(R. 50/66)と述べられ、第二章でヴォードヴィル作家と機智家を扱うとし、第一章は閉じられる。第一章では、生の本来的な流動性が示されていると考える。

第二章は、所作 (actions) 及び状況 (situations) における滑稽さが考察の対象となり (R. 51/67)、喜劇 (comédie) における笑いが主に考察される (R. 52/68)。古典喜劇の手法である繰返し (la répétition) と、その自動的に繰返されるさまが考察され、そこに私たちが見てとるのは、繰返し機械であると述べられる。こわばった感情が生けるものの中にある機械的なものであるとされ、私たちがここに滑稽を見て取ると言われる (R. 53-59/69-76)。また、逆にさるるもの (réversible) であることが、機械的組み合わせの特色であるとされる (R. 63/81)。続いて、曲線のイメージを使って、人物たちが同一の場所に意図せず復帰してしまうこと、無意識に振り出しに戻ってしまうことの滑稽さが述べられる (R. 63-65/81-82)。人が物に似てくるといふこと、その機械仕掛けや自動現象と見做される生命のない運動を真似する人間的出来事に滑稽さを感じ、それを矯正するのが私たちの笑いでありそれは社会的身振りであると言われる (R. 66-67/84-85)。要するに、ヴォードヴィルの手立てである「繰返し」「ひっくり返し」(inversion)「系列の交叉」(interférence des séries)⁴³が、様相の継続的变化 (changement continu d'aspect)、現象の逆行不可能性 (irréversibilité des phénomènes)、それ自体のうちに立て籠っている一列の完全な個性 (individualité parfaite d'une série enfermée en elle-même) という、生物を単純な機械性から区別している外部的特徴の正反対のものとして取り出される (R. 68/86)。区別されるこれらの3つの特徴は言葉の滑稽さを分析する際にも用いられ、翻訳できる滑稽さは、言葉の面への所作および状況の滑稽さの投影であり、翻訳できない滑稽さは、事件の系列が滑稽なものとなり得るのと同様に言葉の系列が滑稽なものになりえることを示している、とされる (R. 90/112)。「或る考えの本来の表現を別な調子に移すことによつて或る滑稽的效果が得られる」(R. 94/115-116)。「しなやかなもの、不断に変化するもの、生きているものに対するこわばったもの、出来合いのもの、機械的なもの、注意に対する放心、つまり自由活動に対する自動現象、要するにそれらが笑いの選り出すものであり、矯正しようとするものである」と、笑いについて繰返し言及される (R. 99-100/122)。第二章では、単純な機械性なしの生物の外部的特徴と、その反対のものについての考えが

示されていると思われる。

第三章では、「笑いが社会的な意義と効力とをもっている」（R. 101/124）こと、「滑稽は何よりも社会に対する人間の或る特殊な不適応を表示するものである」こと（R. 101/124）が確認され、「人間と性格とを扱う」とされる（R. 102/124）。喜劇は「社会生活に対するこわばり」から始まる（R. 102/125）。笑いには「矯正してやろう」という底意があるため、それが純粹に審美的であるとは言えないことが指摘される（R. 103-104/126）。こわばりは非社交性を示すものであり、自分の中にひきこもる有様を示すものであるとされる（R. 105-106/128-129）。人物の非社交性（*insociabilité*）と観客の無感動性（*insensibilité*）（R. 111/135）、自動現象そして放心（R. 113/136）が滑稽になり、こわばりの原因は、「人が自分の身の周り、とりわけ自分の内部に目をむけることをなおざりにすること」（R. 112/136）だとされる。「こわばり、自動現象、放心、非社交性、そのすべてが相互にもつれ合っている、そしてそのすべてによって、性格の滑稽味が作り上げられているのである」（R. 113/136）。芸術については、「かくして絵画にせよ、彫刻にせよ、詩歌にせよ、あるいは音楽にせよ、芸術は我々を現実そのものに直面させるために、実践に有用なシンボル、慣習的にまた社会的に受け容れられている一般性、つまり我々に現実をかくしているものすべてを遠ざける以外の目的はもっていないのである」とされる（R. 120/145）。「虚栄心の特効薬は笑いであり、そして本質的に笑うべき欠点は虚栄心であるといえるだろう」（R. 133/160）とされ、矯正である笑いは笑う相手を仲間と認めていることを示唆してもいいと言われる。また、怠惰を示しさえもする笑いは遊戯のかたちをとっているように見える、とされる（R. 149/178）。この研究で注意してきたのが、善（*bien*）であることに注意が促され（R. 152/181）、社会の平衡化が考察される（R. 152/181）。内への引きこもりが齎す「こわばり」とそれを矯正する「笑い」、これらが生じないか生じても再生するしなやかな社会性と相互適応、それがベルクソンの言う平衡状態であると考えられる。社会はすなわち、しなやかな生がそのまま実現され、平衡であり、善であり、共により良く生きることを促す性格を備えていると考えられている。『笑い』の最終章では、社会性とこのこわばりの解消について、芸術の役割について考えられている。

2-2. ベルクソンの「笑い」について

『笑い』を概観し、「生命性」、「流動性」、「様相の継続的変化」、「現象の逆行不可能性」、「一列の完全な個性」、そして「社会性」とは反対のものを私たちは笑い、矯

正するとされているのが明らかになった。別の言葉で言えば、これらを認識してそれに背を向けること、そこに、私たちの滑稽の認識と笑いの発生の起原があると考えられている。反対の認識によって生じる笑いは、矯正を目的とすると言われ、物質性を解きほぐす役割を持つ。解きほぐすのであって、否定するとは言われない。時間的経過により、背を向けたそれの方に向き直ったとしても、それはもはや背を向けた当初の生命性ではない。つまり、こわばりを否定しても、それは意義を持たない。笑われる側に向かってベルクソンは、周囲をよく見、自分をよく見、そして反省せよ、と述べるに留まる。ここには、反省の力に対する信頼と、戻ることにはできない経過する時間に対する私たちの非力さが示されていると思われる。

2-3. ベルクソンによるスペンサー批判のもつ役割

スペンサーとの関係で、前項までの考察を簡単に振り返ると、ベルクソンは、私たちは何を笑うのかについての考察を軸にして、『笑い』を構成していることが理解される。スペンサー批判が含まれるのは『笑い』の第二章であり、そこでは、喜劇が考察の対象になっている。前章で見た通り、ベルクソンの批判するスペンサーの考察でも、劇場での場面が扱われていた。それを鑑みると、ベルクソンが笑いが生じる場面に留意して扱う箇所を選んでいるように思えてくる。ベルクソンが次のように述べていたことにも注意したい。

我々はこの不均衡が或る場合にあらわしうる或る物、つまり言うなら、原因と結果との系列の背後にこの不均衡が我々に透かして見せている特殊の機械的仕組みを笑うのである。(R. 65/83)

ベルクソンは、私たちはスペンサーの言うこととは別の事象を笑うと言うが、「原因」と「結果」の間の不均衡が笑いと関係するとする点については否定していない。批判を含む冒頭に掲げた考察をふまえ、ベルクソンは、その喜劇で私たちが笑うのは機械的な仕組みなのだが、それは、生の放心（comme une distraction de la vie）

(R. 66/84) であると述べ、考察を進めている。スペンサーは流れの中断により笑いが生じると述べ、流れの中断を私たちは笑うのだとベルクソンは進めていると整理することもできると思われる。スペンサーによる考察はベルクソンに土台を与えている。ベルクソンによるスペンサー批判は、ベルクソンに批判すべき土台を与えるという役

割を持つ。更に私たちに対しては、自身の理論とは異なる理論を展開したスペンサーを、ベルクソンが如何に吸収したかを示すものにもなっている。

3. まとめの考察

本稿は、1でスペンサーの「笑いの生理学」を扱い、スペンサーの言う「笑い」とは何かについて明らかにした。スペンサーにとって笑いとは筋肉収縮活動の一つであり、エネルギー放出運動の一つである。続いて、ベルクソンが『笑い』で扱っていると思われる該当箇所を考察を加え、スペンサーが生理学の対象となる範囲に限定して笑いを考察しているのに対して、ベルクソンは笑いを引き起こす対象をもスペンサーの理論を用いて表現しようとしているように見えることを明らかにした。2ではベルクソンの『笑い』を扱いその概要とベルクソンの考える「笑い」とは何かを明らかにした。ベルクソンの『笑い』は私たちが笑う対象についての考察であり、私たちは生における機械的仕組みを笑うのだとされていた。また『笑い』におけるスペンサー批判の持つ役割についても考察を加え、その批判は自身の思想を展開するための土台になっていると思われることを指摘した。

以上の考察を経て、ベルクソンが『笑い』でスペンサーの笑いについての考察を扱った理由としては、それが劇場における突発的な笑いを論じている箇所であるということ、そして、それが一定の精確な理論であるが故に自身の理論を構築するための土台となり得るとの判断されたこと、が考えられる。また、ベルクソンの要約からは、ベルクソンが自分の理論に引きつけてスペンサーを考察したことを窺い知ることができる。これが林の言う「こんな簡単な要約」がこんな要約になった理由であると考ええる。笑いを巡るスペンサーとベルクソンの議論を照合してみると、筋肉運動という機械的とも考えられる活動における力の放出理論から笑いを考えたスペンサーと、生命活動における機械的仕組みを笑うとしたベルクソンという違いが意識されてくる⁴⁴。ベルクソンによるスペンサー理論の簡単な要約には、ベルクソンの笑いについての考えが、透けて見えるのである。

注

¹ 本稿のアイディアは、鬼界彰夫先生を中心に毎年開講された、筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻哲学分野所属の大学院生で西洋哲学を専門に学ぶ学生のほとんどが毎年

参加した、演習の参加者の助言から得たものである。すなわち、本稿は、ベルクソンとフロイトとの関係について考察する際に助けとなるはずの考察である。また、本稿は本文中で言及した林達夫による『笑い』の注に注目した結果でもある。

² 『笑い』は、ベルクソンの他の諸著作とは異なる仕方でも成立した歴史を持つ著作である。その成立について、増田靖彦氏の解説を引いておきたい。『『笑い』の成立には他の著作と異なる特徴がある。それは、『試論』と『道徳と宗教の二源泉』を除くベルクソンの論文の大半が、単行本化に先立って『形而上学道徳雑誌 *Revue de métaphysique et de morale*』や『哲学雑誌 *Revue philosophique*』などの学術誌に掲載されているのに対し、『笑い』を構成する三つの論文が『パリ評論 *Revue de Paris*』という文学を中心に広く人文科学一般を対象とした媒体で発表されていることである。』『笑い』 増田靖彦訳、東京：光文社、2016 年、269 頁。

³ “Tell paraît être l’idée de Herbert Spencer : le rire serait l’indice d’un effort qui rencontre tout à coup le vide.”

⁴ 引用するベルクソンのテキストは、P.U.F.の *Quadrige* 版に拠り、参考文献表に示した書名の略記号と頁数、参考文献表に記載の林訳の邦訳書の頁数を必要に応じて括弧内に示した。

⁵ 林訳、『笑い』197–198 頁。

⁶ 2007 年発行の *Quadrige* の *Le rire* でも、この箇所がスペンサーの *Physiologie du rire* の 307 頁から 310 頁の内容を指すという解説が付されている。

⁷ *Essays: Scientific, Political & Speculative*, vol. II, *The Works of Herbert Spencer*, vol. XIV, Osnabrück: Otto Zeller, 1966, p. 452. スペンサーのこの論考は、pp. 452–466 にある。分量としては多くはないと言えるだろう。訳するに際しては、参考文献表に記載の木村訳を参照した。また、同じく参考文献表に記載の雨宮俊彦氏によるスペンサーについての考察も参照した。

⁸ *Ibid.*, p. 452. 仏訳は次の通りである。“le rire naît du sentiment d’une inconvenance.” Herbert Spencer, *Essais de morale, de science et d’esthétique. Essais sur le progrès*, Trad. M. A. Burdeau, Paris: Librairie Germer Baillière et C^{ie}, 1877, p. 295.

⁹ *Essays*, p. 452.

¹⁰ *Ibid.*

¹¹ *Ibid.*

¹² *Ibid.*, pp. 452–453.

¹³ *Ibid.*, p. 453.

¹⁴ *Ibid.*

¹⁵ *Ibid.*, p. 454.

¹⁶ *Ibid.*

¹⁷ *Ibid.*

¹⁸ *Ibid.*, p. 455.

¹⁹ *Ibid.*

²⁰ *Ibid.*

²¹ *Ibid.*

²² *Ibid.*

²³ *Ibid.*

²⁴ *Ibid.*

²⁵ *Ibid.*, p. 456.

²⁶ *Ibid.*

²⁷ *Ibid.*

²⁸ *Ibid.*, p. 457.

²⁹ *Ibid.*

³⁰ *Ibid.*

³¹ *Ibid.*, p. 456.

³² *Ibid.*, p. 458.

³³ *Ibid.*

³⁴ *Ibid.*

³⁵ *Ibid.*

³⁶ *Ibid.*, p. 459.

³⁷ *Ibid.*, pp. 461–462.

³⁸ “As above shown, laughter naturally results only when consciousness is unawares transferred from

great things to small — only when there is what we may call a *descending* incongruity,” Ibid., p. 463.

³⁹ Ibid., p. 462.

⁴⁰ 仏訳は次のようになっている。“Mais voilà que cette somme considérable de force nerveuse, au lieu de s’employer à faire aboutir les pensées et sentiments de somme égale, qui étaient à l’état naissant, est soudain arrêtée dans son cours.” p. 308.

⁴¹ Essays, p. 462.

⁴² 本節は、2018年10月7日に関西大学で行われた第69回美学会全国大会で口頭発表した原稿（タイトル「ベルクソンにおける共同性と美——優美論を手がかりにして」）の一部を含む。

⁴³ ベルクソンのいう「系列の交叉」の滑稽さと同じ状況について、フロイトは「不気味なもの」のなかで扱い、そこに私たちは「不気味さ」を感取するとしている。このベルクソンのいう「系列の交叉」ということに対するベルクソンとフロイトという二人の哲学者の扱いの違いに着目して『不気味な笑い』を著したのがジリボンである。

⁴⁴ この相違の根底には両者における生命についての考えの違いがあるように思われるが本稿では扱わない。

参考文献

一次文献

・ベルクソン

R: *Le rire*, 1900. (邦訳『笑い』、林達夫訳、東京：岩波書店、2018年。『笑い』増田靖彦訳、東京：光文社、2016年。)

・スペンサー

Essays: Scientific, Political, & Speculative, vol. II, *The Works of Herbert Spencer*; vol. XIV, Osnabrück: Otto Zeller, 1966. (邦訳「笑いの生理学」木村洋二訳、『価値変容の社会学的研究』、研究双書第49冊、大阪：関西大学経済・政治研究所、1982年。)

Essais de morale, de science et d'esthétique. Essais sur le progrès, Trad. M. A. Burdeau, Paris: Librairie Germer Baillière et C^{ie}, 1877.

二次文献

雨宮俊彦、『笑いとユーモアの心理学——何が可笑しいの？』、京都：ミネルヴァ書房、2016年。

石井敏夫、「哲学と笑い——『笑い』に潜む〈哲学の倫理〉」、『ベルクソン化の極北』、千葉：理想社、2007年。

渡辺哲夫、『フロイトとベルクソン』、東京：岩波書店、2012年。

Pierre d'Aurec, “De Bergson spencerien au Bergson de l’“Essai””, *Archives de philosophie*, vol. XVII, cahier 1, Paris, 1947.

フロイト、「機知——その無意識との関係」中岡成文、大寿堂真、多賀健太郎訳、『フロイト全集8』、東京：岩波書店、2008年。

アンリ・ベルクソン、ジークムント・フロイト、『笑い／不気味なもの 付：ジリボン「不気味な笑い」』、原章二訳、東京：平凡社、2016年。

ジャン＝リュック・ジリボン、『不気味な笑い フロイトとベルクソン』、原章二訳、東京：平凡社、2010年。

Patricia Verdeau, “Sur la relation de Bergson à Spencer,” dans *Annales bergsoniennes III. Bergson et la science*, Paris: P.U.F., 2007.

(きた・なつこ 茨城工業高等専門学校国際創造工学科非常勤講師)